

革命の館パレ＝ロワイヤル

ルネ・スウェンネン

杉山正樹 訳



革命の館パレ＝ロワイヤル

ルネ・スウェンネン
杉山正樹 訳

工業学院図書館
藏书章

Palais-Royal by René Swennen
Copyright © 1983 by Julliard
Japanese translation rights arranged with Julliard
through Bureau des Copyrights Français.
Japanese edition © 1990 by Chuokoron-Sha, Inc.

ルネ・スウェンネン

革命の館パレ＝ロワイヤル

1990年10月10日 初版印刷 1990年10月20日 初版発行 © 1990

訳者 杉山正樹

発行者 嶋中鵬二 印刷所 三晃印刷 製本所 文勇堂製本

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替東京2-34

Printed in Japan
ISBN4-12-001973-X

目次

第一部

熱月 テルミドル

5

第二部

葡萄月 ヴァンアミエール

125

第三部

パレロワイヤル

219

付録 共和暦・グレゴリ―暦対照表

293

訳者あとがき

295

「^{テルミドル}熱月の政変からは、偉大にして深遠な教訓を引き出すことができる。
徳性、純粹、廉潔は地獄を地上に居座らせ、悪徳と腐敗が世界を救う」

——この言葉を残したジャン・デュトールにこの書を捧ぐ。

革命の館
パレ
||
ロワイヤル

第一部

熱月テルミドール

話題がたまたま大革命が起こるまえの旧^{アン・サン・レジーム}制度時代のことになると、ジュリヤン・テロワーニユは殆ど何も覚えていないことを認めざるを得なかった。彼の記憶の糸は、十二歳になった一七八五年のあたりでブツリ切れていた。父親はリエージュの聖ランペール司教座聖堂参事員であったが、その年に痛風の発作を起こし、六十三歳で亡くなった。父が手をつけた女中が母親で、彼女はその五年前、すでに歿していた。ジュリヤンの心のなかで儚く消えかかる母の面影は、月日が経つにしたがつて、ますます霧のなかにかすんでいった。彼は数少ない私物がつまっている古い籠を開けて一枚の油絵を取り出し、驚く友人たちの目の前に広げて見せた。それは、司教を兼ねる大公の宮殿を略奪に行った時、ナイフで切り取り、羊皮紙のように巻いて持ち返つて来たものである。その絵は、彼が生まれる三十年ほどまえ、ヴェルブリュック司教公の時代の宮廷の一場面を表わしていた。ヴェルブリュック司教公は、血色のよい、剃りたての顔で、フリーユト、バスーン、ヴィオラ・ダモーレ各一管から成るバロック音楽のオーケストラを熱心に聴いているのだが、ゆったりと腰を降ろしているその姿には威厳があり、まわりを副司祭、司教座聖堂参事会員、廷臣が取り囲んでいる。この絵を描いた画家は、もとより、これら取り巻きの人物に個人的表情を与えるつもりなどなかったので、彼らは一様に、厳めしく、うやうやしい態度で、

大公を見つめている。ジュリヤンの父親は司教座聖堂参事会員たちの二列目にいて、平服にフランス教会派風の襟がついていた。これは、神聖ローマ・ゲルマン帝国に属するこの公国のなかでは、ヴォルテールの合理主義を奉ずる革命信念の表明に等しかった。しかし、このようなことをしても、大公のご機嫌を損ねることは無かったに違いない。というのも、大公自身が手にしている本の表題を虫眼鏡で拡大して見ると、ヴォルテールの『哲学的書簡』と読み取ることができるからである。これらの人々は皆、ぎこちなく、田舎風で、十八世紀末の社会的大混乱を頭に思い描くどころか、春風駘蕩といった様子をしていた。うわべだけを取り繕ったこれらの顔とは対照的に、画家は絵の左側に、うっとりするほど美しい若い女性を大公に背を向けるように配した。彼女は小犬とたわむれ、音楽に耳を傾け、ほほえみを浮かべていた。たぶん、大公の側室なのであろう。現在のためだけに生き、自分のことにしか関心がないように見えた。その若い女性の洗練された美しさは、思想のなかに自由主義、風俗のなかに自由奔放という小粒でもピリッとした例の山椒の味わいを持つ旧制度全般を表現していた。その味がまた、その時代の特徴を表わすしるしでもあった。ジュリヤンは、あたかも聖遺物を取り扱うかのように、念を入れて画布を巻いた。それは彼の記憶が始まる年代より三十年もまえの社会を彷彿とさせた。竹馬を履くと、背丈が群衆の頭より高くなって視界が開けると同じように、この絵を見ると、ジュリヤンは革命のさなかに社会が失ったものすべてを眺め渡すことができた。

ジュリヤン・テロワーニュがパリに着いたのは、一七九三年四月十四日、風の強い日曜日のこと

とであった。オーストリア軍がリエージュの街に戻って来たので、その住民が百人ばかりパリに避難して来た。そのなかにジュリヤンもいた。パリ市革命自治議會は、これを機に、歓待の祭りを催すことに決めていた。バステュー広場を出発したすべての行政・司法機関の幾つもの使節団が、リエージュの避難民をサン＝マルタン門に迎えに出、リエージュ市の役人たちは懸章をつけ、市の古文書類を荷車に載せて運んで来た。一行は大群衆に囲まれ、かつての市庁舎、パリ市共同館に向かって進んだ。そこではマルセイユ義勇軍の歌をアレンジした替え歌が客人を歓迎した。

武運つたなき母国ははくにの

勇ましき子ら、いざ来たれ！

思わぬ運命さだめに身を任せ

住みに来られよ、わが国へ！

ところが、もうその翌日から、生きるために働かねばならなかった。ジュリヤンは或る過激共和派の人物の推薦で、ティクスランドリー通り（現在のボドワイエ広場にあった通り）の織物屋に職を見つけてあった。そこは、パリのなかで最も悪臭のひどい、最も人の多い界限であった。その通りは、サン＝ジャン＝アン＝グレーヴ教会で定期的に会合が開かれるアルシ地区に属し、サン＝ジャック＝ラ＝ブシュリー教会を本拠にしているロンパール地区と、プチ＝サン＝タントワヌ教会に本部を置く騒動好きなロワード＝シル地区に隣接していた。ここでは、革命の振

動がものすごい騒音になって鳴り響いていた。イノサン墓地が閉鎖されてから数年になるが、しつこい死臭が相変わらずあたり一面にただよっていた。悪臭は、はたして地中から立ち昇るのか、それとも家の外壁にこびりついているのか、よくわからなかった。暑い時には、いつそうひどくなり、ものすごい悪臭が立ち込めた。場所がなかったのも、数か月前からサン＝ジャック＝ラ＝ブシュリー教会の墓地に、再び死体を埋めるようになった。その土は死体を一週間で食い尽くすという評判だった。パリの人々は自らすすんで体を洗うことをしなかったもので、地区の過激共和派の討議は、出席する市民の放つ日常の悪臭も加わって、いつもまるで腐臭につつまれたような空気のなかで行なわれた。ジュリヤンは、リエージュにいたところ、孤児院の神父たちのおかげで、毎土曜、冷水風呂に入る習慣を身につけていた。小川の水が巧妙なポンプ装置で、季節を問わず、修道院の最上階まで汲み上げられていたのである。ティクスランドリー通りには、残念ながら、そのようなものは何もなかった。水がひいてないので、公衆浴場に通わねばならなかった。それはパリ市全体で九つしかなく、その大半は、あまりにも遠く離れていたり、入浴料が高すぎるので、徒弟の身分では通うのがはばかられた。したがって、サン＝ルイ島の近くのセーヌ河で水風呂をとることにした。そこには、水風呂専用の船が係留されていたので、ジュリヤンはその風呂船の常連になった。そのため、仕事場ではいつも小ざっぱりとしていられた。歓迎の贈り物として親方にもらった青いサージの服は、川原に出て、自分でじゃぶじゃぶ洗った。酒もタバコもやらず、店を出してくれる普通の食事で我慢し、衣類も買ったことがなかった。そんなわけで、一週ごとに貰う日当二十スーの給金を、そっくりそのまま貯めることができ、それを籠のなかにしまっておいた。彼はそこから三日ごとに四スー取り出して、風呂船に通った。

ジュリヤンの苗字は、リエージュではごくありふれたもの——テルワーニュ——だったので、アルシ地区の書記にその綴り字を言うのに何の苦勞もなかった。書記はそれをごく当然のようにテルワーニュと綴ったので、このリエージュの若者は喜びに包まれ、いっきにバリっ子になったような気がした。だがこれは、偶然的の仕業以外の何ものでもなかった。一家の仕来たりからすれば、彼は司祭職に身を捧げなければならないところであった。しかし、その方面にはまったく素質のないことが明らかだったので、彼の教育に当たった孤児院の教師たちは、手を使う仕事につかせることに決めていた。パリに着いた時、彼は機械についての知識をほとんど持ち合わせていなかったが、情け深いジャコバン党員の親方の監督のもとで織物を扱う秘訣を覚えた。その親方は、仕事を愛し、祖国を愛し、謙讓を愛し、共和国を愛するのと同じ気持ちで、見習いの徒弟たちを育てていた。毎日、『デュシェーヌ親爺』新聞（全国で最大の発行部数を誇った下層階級的左翼紙、編集者はエペール）が店に配達されるので、ジュリヤンは革命の諸事件の推移をひとつひとつ知ることができた。それは、マリィアントワネットの処刑について、『鶴のような首から、拒否権を象徴する女の頭が切り離されるのを自分自身の目で見たあと、デュシェーヌ親爺が味わったあらゆる喜びのなかの最大の喜び』であったり、また別の時は、『ジロンド派の処刑について、『ジロンド派やロラン派が列をなして革命広場（現在のコンコルド広場）に連行され、ギロチンにかけられるのを見たあと、デュシェーヌ親爺の大きな喜びであり、卑劣漢ロラン（ジロンド派内閣の内務大臣を務めたが、自派没落の後、妻の処刑を聞いて自殺）の遺言と、そのろくでなしの女房の告白』であったりした。店のある建物の七階でジュリヤンが寢室を共にしている見習いの徒弟たちは、すすんで数多い革命祭に出かけて行った。お祭りはジュリヤンがバリに着いた四

月十四日以来、不足することはなかった。マラー（急進派指導者）の無罪釈放、五月三十一日の騒動（ジロンド派の追放）、シャルロット・コルデー（マラーを暗殺した女性）の裁判、王政廃止の八月十日記念祭、マリィアントワネットの処刑、ヴェルニョー（ジロンド派の領袖）やジロンド党員の処刑、国民公会が百二十六名の議員を追放した十月三日の革命祭など。しかし、ジュリヤンは沈黙と孤独を選んだ。仲間が人を小馬鹿にしたような声で話しながら階段を急いで降りて行くたびに、一人になれる幸せにゆっくりとひたるのであった。そんな時、区の図書館から借りてきたあれこれの本を藁蒲団のしたからひっぱり出し、ロソクの明りで、夜が更けるまで読みふけた。織物屋の親方は、ジュリヤンのこの無口な性格に気づいていた。その勉強意欲を励ましなが、ひっこみ思案の習性を心配してもいた。そんなわけで、ときどき声をかけ、不順な天候や、食料品の高いことや、聖職者の偽善性などについて話をした。しかし、ジュリヤンはいつも逃げ腰の返事ばかりしていた。彼は、とても小さい時から、自分は特別の運命を担っているという確信にとりつかれていた。どんな運命なのか？　と言われると彼にもわからないが、同じ年頃の少年の仲間には加わったことがなかった。彼らがあまりにも無頓着で、短絡的な意見しか持っていないことに驚きあきれていたからである。妙に気がめいったり或る日のこと、彼はジャン・ジャック・ルソーの『新エロイズ』を開いた。その日は朝から歯痛に悩まされ、なかなか寝つかれなかった。愛の告白、高ぶる感情、永遠の誓いなど、感じやすい魂のこうしたおのきが、あますところなくこの物語のいたるところに充滿しているので、彼はこの上なく感動した。涙が頬をつたわって流れていたが、うまい具合に同僚は眠っていた。自分もまた、エロイズのような女を腕に抱きしめ、彼女のために輝かしいことを成し遂げてみたいと思った。風が棟瓦か

ら嵐のように吹き込み、寢室のなかでひゅうひゅう音を立て、渦を巻いていた。マラーのこと、エベール（パリ市革命自治政府の第二助役、急進派の領袖、後に処刑）のこと、革命のことなどは、遠い異国の出来事のように思われ、ジュリヤンは自分のなかに新しい世界が生まれるのを感じていた。それを、今までにない新しいやり方で表現してみたかったが、残念ながら、画家でも作家でもなかった。シャルロット・コルデーのひそみにならって、誰かを暗殺しようとしても、それは、彼の力にあまった。いつか、華々しい働きをするチャンスが来るだろうと思いながら、いつしか寝入ってしまった。

およそどんなにつまらぬ騒動でも、何か大きなことをやってやろうと、ジュリヤンに決心をさせるきっかけにはなり得たはずである。彼はこの閉じ込められた生活に、もう我慢ができなくなっていた。やっと孤児院を抜け出せたというのに、こんな生活を続けていたのでは、否が応でもみみっちい根性を持たざるをえないような生き方が待っている感じであった。だが、それとは関係なく、世の中は彼のまわりで変動していた。社会が下克上の状態だったので、ふつうでは考えられない活気がみなぎっていたが、ジュリヤンは何もせず、ただ手をこまねいていた。というより、これからさきも置かれるであろう奴隷のような生活に、自分自身を縛りつける鎖を作り続けていた、と言ったほうがいいだろう。少なくともリエージュでは、司教公制度の破壊に手を貸したのに、ここバリでは、街を見てもその気が起こらなかった。自分は党派の争いには関係がないという気がしていた。街の過激共和派を見ているだけで、胸くそが悪くなった。互いに憎みあう

彼らの姿は、見るに耐えなかった。街は不潔で、水は不足し、浴場は少ない。彼の頭のなかでは、これらのことと革命のあいだに、ひとつの繋がりができあがっていた。パリは腐敗のなかにすっぽりひたっているかのようであった。家々に腐敗が匍いのぼり、外壁一面に貼られたポスターもすぐぼろぼろになり、雨や風のために一枚一枚はがれ落ちて行つた。排水溝のなかも腐っていた。つまっている汚物は、自然の地形で地面が傾斜しているので、とどのつまりはセーヌ河に流されて行つた。貴族から奪つた戦利品、フリジャ帽（フランス革命の時、革命派が自由の象徴としてかぶつた赤い帽子）、破れた旗など、革命的な垂れ飾りともいふべきものが吊してある大邸宅の切妻にも腐敗は匍いあがっていた。かつてはルイ十五世広場と呼ばれた、パリのなかで最も美しいあの革命広場（現在のコンコルド広場）にも腐敗は流れていた。ギロチンが建っていたので、汚水溝から凝固した血の匂いが立ちのぼっていた。腐敗は、このティクスランドリー通りにもその兆しを見せ始めていた。市当局が撤去を決めるまえは、商品の包みは何日ものあいだ車道で悪臭を放っていた。ジュリヤンは、故郷リエージュの司教公の宮廷、そこを照らすローソク、正晩餐会、メヌエットの曲が鳴り響く舞踏会をよく夢に見た。それなのに、それらを実際に見たことは一度もなかった。記憶の始まるずっとまえに、忘却のなかに吞み込まれてしまった思い出といったものがあるとすれば話は別だが、そんなもののあろうはずはない。彼がこのような精神状態で日を送っていた時、パリ中が悲劇『バメラ』の蔭口を囁き始めていた。しかしながら、それは取るに足らぬつまらぬ事件であつた。『バメラ』は、もとは「フランス座」と呼ばれていた国民劇場で上演されていたかなり平凡な芝居で、ジャコバン派の検閲にひっかかるようなことが書かれていたとすれば、ただ筋立てが貴族社会で展開され、貴族に感動的な感情を持たせたことであ